

ふれあいサッカー教室 in 東松島 実施報告書



横浜マリノス株式会社
復興支援プロジェクト
2012. 8. 5



チカラを
ひとつに。
-TEAM AS ONE-



実施概要

- ◆タイトル：横浜F・マリノス ふれあいサッカー教室 in 東松島
- ◆日 程：2012年8月5日(日)
- ◆場 所：宮城県東松島市
- ◆人 員：46名(選手25名/監督/嘉悦社長/コーチ6名/スタッフ13名)
- ◆参加者：118名 ※東松島サッカー協会所属少年団
- ◆天 候：晴れ
- ◆主 催：東松島サッカー協会
- ◆共 催：横浜マリノス株式会社
- ◆協 力：東松島市役所／航空自衛隊 松島基地
- ◆内 容：
 - ・サッカー教室 ※ウォーミングアップ/ミニゲーム等
 - ・選手とのふれあい
 - ・選手からプレゼント (サイン入りユニフォーム)
 - ・保安道路企画株式会社様から「サッカーボール」寄贈
 - ・集合写真撮影



チカラをひとつに。
- TEAM AS ONE -



谷井修平基地司令
より松島基地に所属
するアクロバット飛
行を披露する専門
チーム、ブルーイン
パルスのサイン入り
写真パネルを頂きました



F・マリノスからは選手のサイン入りユニ
フォームをお渡し



サッカー教室の開会式



チカラをひとつに。
-TEAM AS ONE-



先ずはみんなでウォーミングアップ



いよいよ学年ごとに分
かれてミニゲーム



チカラをひとつに。
- TEAM AS ONE -



楽しかったミニゲームも終了、子供たち
と選手の触れ合いタイム



チカラをひとつに。
- TEAM AS ONE -

所属クラブ毎に子ども達と選手の記念撮影





閉会式では、工藤昌明東松島市教育長、村上雄一
東松島サッカー協会会長よりご挨拶頂きました



東松島市サッカー少年団の代表の
児童よりご挨拶を頂き、今年のサッ
カ教室は終了しました

活動にご賛同頂いた「保安道路企画
株式会社」さまより、ご寄贈頂いたサッ
カボール100個を東松島サッカー協
会にお渡しました



東松島市サッカー少年団代表児童挨拶

ぼくたちは去年の5月に続き、横浜F・マリノスのみなさんと、また一緒にサッカーができるることを楽しみにしていました。去年はサッカーを続けられるか不安な状況でしたが、みなさんと一緒にサッカーをしてはげまされ、そしてチャレンジする勇気をもらい、サッカーすることができます。ぼくは昨日の試合を見に行き、みんなのあきらめない全力のプレイを肌で感じることができ、みなさんを目標に全力でプレイしていきます。こんどぼくたちがサッカーを通じてこの町を元気にしていきます。

中村俊輔選手コメント

去年に引き続き、今年もこういう場を設けてもらって、良い時間が過ごせたと思います。僕たち選手も楽しんでやれたと思うし、子どもたちも楽しそうにやってくれていたので、こういう機会で笑顔をたくさん見られたことが良かったです。

去年は瓦礫の山だった町が、1年経って田んぼもとても綺麗になっていたし建物も直っている部分もありました。子どもたちの笑顔も増えて、みんなが頑張って立ち直ろうとしていることに改めて気づかされました。このサッカー教室を通して、選手たちもたくさん刺激を受けたと思うし、今後もいろんな形での支援活動を続けることが大事だと思いました。

復興支援活動というものは、寄付のお金だったり物だったり、こういう活動だったり、いろんな形があると思うけれど、僕らが出来ることはサッカーなので、チャリティーマッチや、Jリーグのチームで動いたり個人で動いたりすることが大事だと思うし、やっぱり1番は続けることが大切だと思います。

今日のサッカー教室を通して選手のことを覚えてくれた子どもたちもいると思うので、ベガルタ仙台との試合の時は、ぜひスタジアムに足を運んでもらってピッチで頑張っている姿を見てもらいたいです。



◆所感

今シーズン初め、選手会から今シーズンの東松島訪問の提案があり、この訪問が実現した。クラブとしての東松島市訪問は、2回目であり、昨年5月の訪問は、チームの半数以下のメンバーでのものだった。

しかし、今シーズンは、監督以下、コーチングスタッフの想いもあり、トップチームの全スタッフ、全選手が訪問することになった。昨年は帯同したスタッフによる手弁当でのオーガナイズ(昨年はコーチングスタッフは不参加)であったが、今年は、コーチングスタッフによる進行、選手会による子ども達とのふれあいタイム企画(プレゼント抽選あり)など、トップチーム内が一体となった準備が進められた。

当日参加した選手たちの表情はみな明るく、前日に試合をこなした選手たちも、汗をかくごとに笑顔が広がり、子ども達と本気のサッカーを楽しんでいたのが印象的であった。

また、子ども達の中には、「お母さんが行けっていったから」と初めは曇り顔の女の子もいたが、いざ、選手たちを目の前にし、サッカーが始まると、それまでの顔が嘘のように明るくなり、額にとどまらず、顔中汗だらけになるほどボールを追いかける姿も見られた。

本来、小学生が対象であったが、未就学の子どもに対しても、リハビリ中の天野選手、リハビリ担当の久保田トレーナーが、天野選手の出来る範囲でのワークで、その子どもを対応する等、それぞれの立場で、それぞれにできる対応をしてくれたことも印象に残っている。

場の設定を担当した、阿井コーチも、保護者とのふれあいの場や全体が見渡せるよう工夫したレイアウトをセットしてくれ、非常にフレンドリーな時間と空間を過ごすことができた。



場を提供してくれた松島基地はもちろん、基地、各少年団との調整等を担当してくれた松島市役所の皆さん、基地サッカーチームの皆さん、そして、市の教育長、市のサッカー協会会長にもご協力いただき、無事に終えられたと思う。もちろん、保護者の皆さんや少年団の監督など、見えない所で参加を支えてくれていた方々のお陰でもある。感謝の気持ちで一杯である。

選手たちは、東松島から帰浜し、日々に感想を伝えてくれた。

「田んぼができていたのには驚きました。でもその脇に、当時のままの壊れた家がありました。」

「復興が進んでいるともいえるし、時間が停まっているともいえる。」

「子どもたちは、横浜の子ども達より、ひとつなづこく、無邪気でした。」

「こういった活動は、ここで終わらせるわけにはいかないし、継続することが大事だと思います。」

「やっぱり、ぼくたちにはサッカーでみんなを元気にすることができるんだ、ということが分かりました。」

「サッカー頑張ろうって思いました。」

それぞれのサッカーへの想いが改めて深まった訪問であったと思う。